

校長室だより～和光高校今昔 第20号 H26.9.19

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

## 忘れられない体育祭



昭和59年の体育祭は久々の色分け縦割りブロックで実施された。当時は10クラス、3つの学年が抽選で1つの団を形成する。3年生の男子体育委員がその色の団旗をはためかせ、団ごとの入場行進から始まる開会式は近年にない整然さで、その後の戦いの盛り上がりが期待された。

各団は色が指定され、鉢巻きで競技に挑む。赤・白・緑・青・黄・茶・紫・桃・水色・黄緑の10色であり、応援席の後ろには趣向を凝らした製作係が一生懸命描いたパネルが並べられる。当時の写真などから8m×4mと推察されるなかなかの大作揃いであった。サテン生地手作りのハッピーはアイドル親衛隊のようで当時の定番。文化祭などあらゆる行事で活躍していた。

体育祭を運営していたのは生徒会、顧問の藤野賢教諭（現在川越高校勤務）は、この年の体育祭を次のように記している。

レースは最高潮に達していた。もう椅子には座ってられないという風に多くの生徒がゴールのまわりに集合していた。アンカーである先生方は最後のトラックをすでに半周まわっている。あまりの興奮に役員の子供も自分の仕事を忘れ、選手たちを見守っていた。一位で走っていた先生がゴールインし、祭りは終わった。(若樹より)





最終種目であった色別リレーのゴールシーンについて書かれたものだが、少し補足を加える。まずこの文章を書いた藤野教諭は、冷静沈着を絵にかいたような男で数学の先生らしく常に落ち着いており滅多なことでは感情を表にあらわさない。しかも機関紙である「若樹」にはそれ相応の役目があるはずだとして「記録」のみを示すものだと考えていた。したがって勢いと興奮に満ち溢れているこの文章は、極めて藤野らしくないものだ。如何にすべてが興奮し感動したのかを感情そのままのこの文面から察することができるのだ。



あらためて、ここでの登場人物を紹介すると、主役は体育科の北村・石丸の両先生、ともに初めてのクラス担任を務めていた20代前半の話だ。実はこのレースの前に伏線があった。前半に行われた「追いかけて玉入れ」という競技で、3年3組担任西見正が大失態をやらかしている。この種目は籠を背負って逃げる先生に玉入れの玉を持つ生徒がいかに沢山の玉を放り込めるかという競技だが、逃げる西見は足がもつれ転倒し、その隙にすべての玉を籠に入れられ相手チームに大量得点を与えるはめになってしまった。実はこの3-3と石丸率いる2-6が同じ色であったのだ。従って西見の失点を挽回する友情の物語でもあった。話を戻すが、最下位争いをしていたチームにあって最後のリレーでアンカー石丸が大激走。バトンを受け取った時には下位グループであったものの快足を飛ばし前を走る各色アンカーの郷家・武井などの先生方をごぼう抜き。最後の20mで余裕トップであった北村をかわし見事1位になった瞬間が藤野の文につながる。

当時埼玉ラグビー教員チームの主将・FBとして全国制覇も成し遂げた石丸一世

一代の晴れ姿であった。リレーの大量得点により総合でなんとか2位となり、西見の窮地を救い、剣道部ながら短距離だけには自信のあった大学の先輩・北村をゴール寸前で差し切ったシーンは本当に格好良かった。



行事が活発に行われ、生徒も教員も全員が勝ちにこだわり、とりわけ担任が先頭に立ちクラスをけん引する風潮があった体育祭を象徴するかのような昭和59年の秋であった。

もうすぐ体育祭が始まる。真剣に対峙してこそ新しいドラマが生まれるはずだ。生徒たちの奮闘に期待したい。